1 Outline

“自然の下で”

～六甲山の麓に広がる文化圏～

（ミュージアムロード）

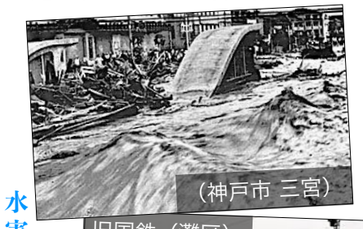
＜コンセプト＞

- **「自然」を忘れない**
  自然があるから人は住め、
  「文化」が生まれる。
- **林を潜る**
  涼しい、自然に浸れる。
- **心地よい通り ＋ 文化施設**
  歩を進めたくなる。

六甲山 こんな歴史が（緑の回復がなかったら、今の文化は．．．）

1) 奈良時代から伐採（燃料などに）。
2) 六甲山の岩を切り出して大坂城を築いた豊臣秀吉は、
   「草木伐採、勝手たるべし！」とお触れ。 → 六甲山伐採に拍車が掛かる。
3) ついに「ハゲ山」に（明治時代）。
   後に神戸へやって来た植物学者の牧野富太郎は、六甲山を見てこのように語った。「雪が積もってるのかと思った。」
4) 植林を開始（1902年）。 ← 自然を失った六甲山は、水害を頻繁に起こしていた。
5) 回復には未だ未だの六甲山、1938年に「阪神大水害」を起こす。
   麓に住んでいた谷崎潤一郎は、この様子を小説「細雪」に。

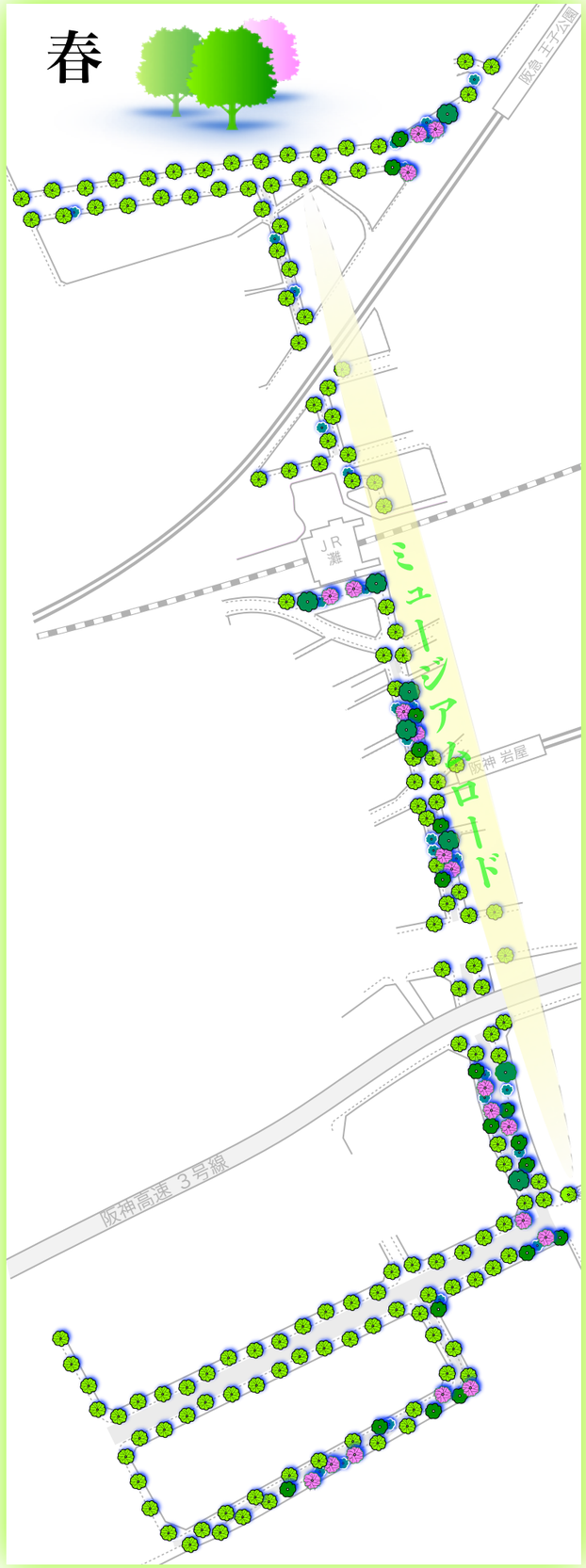
水害

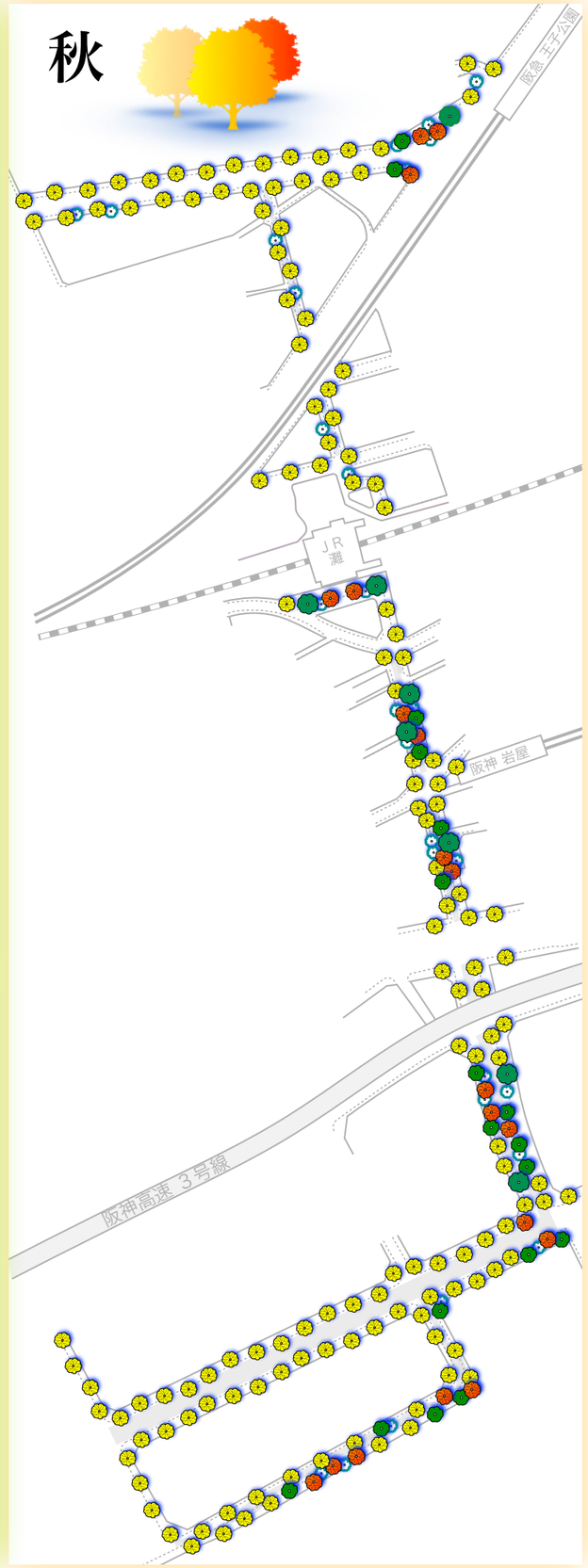


（神戸市 三宮）

旧国鉄（灘区）

植林の様子

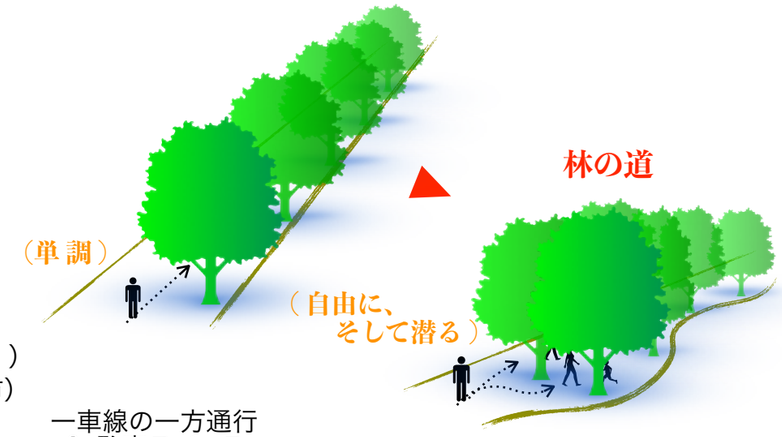




2 Details

【道】

- **歩行者を優先し、車道を次のように変更。**
  - **1）「BBプラザ美術館」以北：**
    一車線による一方通行。
    「BBプラザ美術館」～「JR灘駅」間は蛇行させる。
    （→ 歩行域と樹木配置に変化を生み、車走行速度を抑制。）
    例：狭い通りの商店街「パークアベニュー」（沖縄市）
  - **2）「BBプラザ美術館」～「県立美術館」：**
    中央分離帯のない片側一車線の上下通行とし、蛇行させる。
  - **3）「HAT神戸なぎさ公園」前の車道：**
    一車線による一方通行とし、蛇行させる。
  - **4）東西を走る幹線「県立美術館」～「アイスキャンパス」間：**
    中央分離帯を撤去し、歩道を広げる。
- **1)～3）は、土日祝日の車走行を不可に。**



【植 栽】

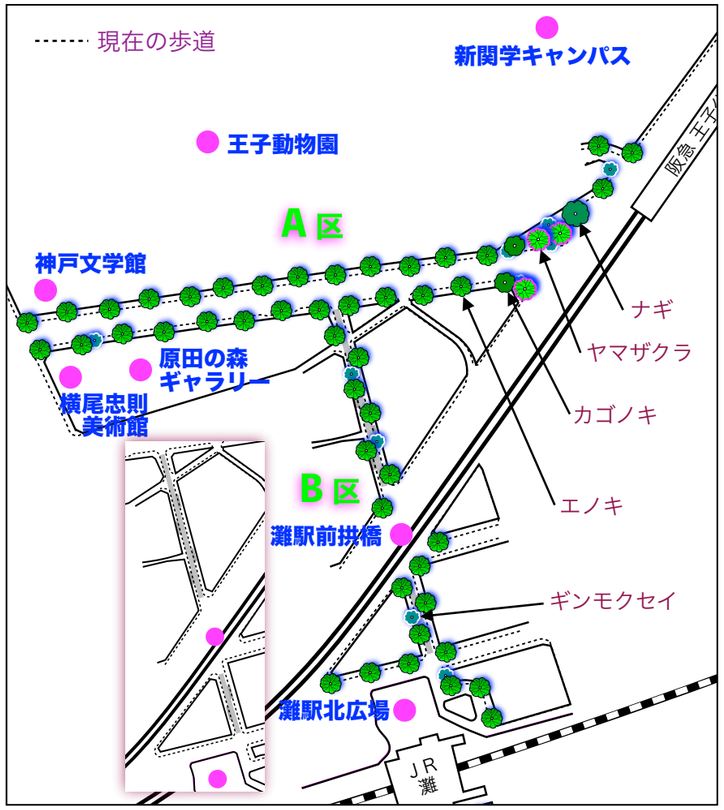
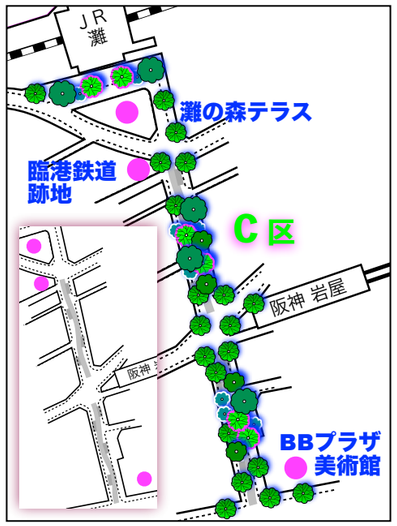
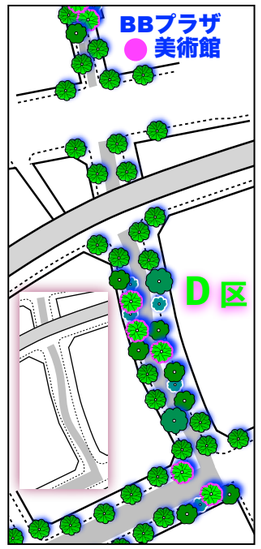
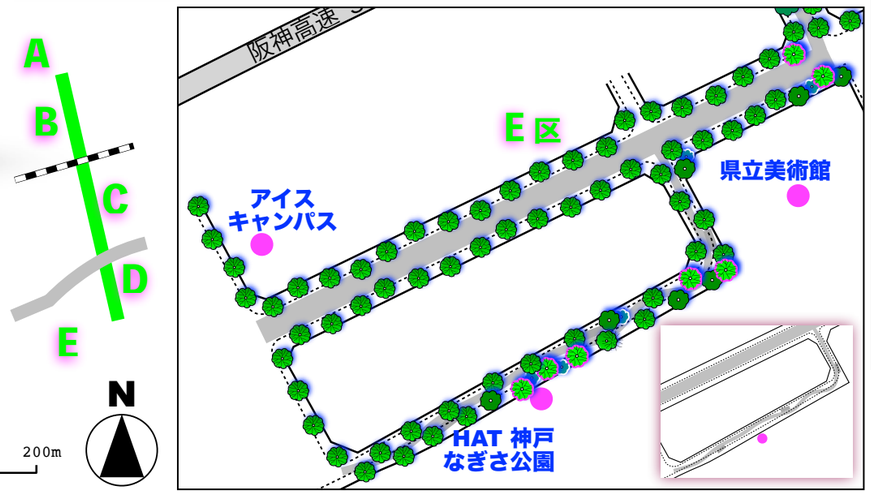
- **樹木は整然ではなく“ランダム”に植栽。王子動物園南面の東西に走る車道等の歩道並木は左右交互に植え、歩行者は蛇行しながらも潜る感覚に。**
  （→ 樹々を潜ることで、自然の中を散策する気分に。視覚的には、前方に樹が沢山あるように映る。）
- **落葉樹のエノキ／ヤマザクラ（花木）、常緑樹のカゴノキ／ナギ／ギンモクセイ（淡い芳香）を植栽。**
  （→ 花木や常緑樹は、空間に変化を生むと同時に、歩行者が現在位置を知る手掛かりに、 地域住民には身近な花見処になる。）
- **樹は自然に育てる。剪定は歩行・車走行に支障がある場合などに限る。**

【アートの設置】

- **林の通り（ミュージアムロード）を象徴し、林の空間をより一層引き立たせるインスタレーション アートの作品を設置。**

【地域が集う】

- **潤いある「ミュージアムロード」を、植物好きの人たちの「○○会」や「オープンガーデン」発足の“芽”に。**
  （→ 地域に活性をもたらす。）
- **大きな交差点付近には、樹木の根元辺りに適度な花壇スペースを。**
  （ボランティアによる手入れを期待。）
- **季節感を味わった後の落ち葉は、適所に設ける堆肥づくり用の囲い柵へ。**
  （→ ロードの花壇、地域の人たちの庭や鉢植えなどに利用。）

【その他】

- **通行者に文化施設の存在を知らせる、林の趣を壊さないシンプルな案内板を設置。シンプルさは、文化施設も際立たせる。**
  例：○○○○美術館 ▶
  （施設等を説明する必要があれば、各施設が独自に入り口付近に表示。）
- **所々に、休憩用のベンチを設置。**
  （→ 座りながら、自然の良さをさらに感じることにも。）